Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 播磨の俳人たち |
| Author(s) | 渡邉, 志津子 |
| Citation | 大阪大学, 2011, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/59386 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【34】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 渡邉（富田）志津子（わたなべ　とみた　し　づ　こ） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（文　学） |
| 学　位　記　番　号 | 第　２４８２４　号 |
| 学位授与年月日 | 平成23年５月２日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第２項該当 |
| 学　位　論　文　名 | **播磨の俳人たち** |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教　授　飯倉　洋一<br>（副査）<br>教　授　出原　隆俊　　教　授　加藤　洋介 |

## 論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、2010年１月20日に刊行された研究書『播磨の俳人たち』（和泉書院刊）を学位申請論文として提出したもので、Ａ５判276頁(索引12頁を含む)におよぶ。

本論文は、近世における播磨の俳壇、とくに加古川・姫路・高砂・加西の各地域について、個々の俳人の活動に即して調査考察を加え、日本俳諧史の潮流の中に位置づけようとしたものである。

論述は地域ごとに分かれ、「Ⅰ　加古川の俳諧」「Ⅱ　姫路の俳諧」「Ⅲ　高砂の俳諧」「Ⅳ　加西の俳諧」という4部構成となっている。とくにⅠとⅡに紙数を割き、Ⅰでは、加古川において、青蘿を元祖とする栗の本一門が生長していく状況を描き、Ⅱでは、元禄期、姫路に惟然が来訪することからはじまる風羅堂一門の形成と展開を叙述する。そして、播磨の多くの俳人は、この二大俳壇のいずれかに属していたことを実証的に裏付けている。

Ⅰの第一章では、栗の本一門の祖である青蘿が加古川に俳壇を形成することになった経緯、芭蕉を顕彰していくことで栗の本一門を拡大させていく様相、その門人たちの活動、また青蘿以前に活躍した瓢水を取り上げて調査考証している。第一章の二では、全国的に盛り上がる芭蕉顕彰活動を背景に、自らを芭蕉につなげながら播磨の庄屋を門人にしていく青蘿の俳壇経営の実態を明らかにし、三では栗の本一門の重鎮である雨人・蘿来・李雨ら三木家の人々の俳諧活動を、四では栗の本一門を経済的に支えるとともに青蘿の都進出に力を尽くした田中布舟の役割を論じている。第二章では、地方俳人の典型としての瓢水の事跡を追い、新資料『おそねはん』を紹介しつつ、その大坂での地位の高さを明らかにしている。

Ⅱでは、千山を始祖とする風羅堂一門の生成と展開を追う。その前史（第一章）を概観したのち、第二章では、芭蕉の門人惟然が姫路を訪れ蕉門俳諧の種をまいて以来、惟然の季語や定型にとらわれない破調の俳諧が姫路を席巻し、やがて終焉を迎えるまで考察し、その後芭蕉顕彰運動を推進した寒瓜によって堅実に一門が拡大していくさまを多くの資料に語らせている。さらに寒瓜以下の風羅堂継承者とその事業、とりわけ風羅堂一門の遺物について考察したのち、第三章では姫路藩士の松岡大蟻や藩主の弟である酒井抱一の俳諧についても取り上げている。

Ⅲでは、高砂地方の俳人たちについて、Ⅳでは加西地方の俳人たちを論じ、播磨全体の俳諧史がかなり見渡せるようになっている。

## 論文審査の結果の要旨

俳諧研究は、芭蕉とその一門、蕪村とその一門の研究に偏っており、地方俳諧史研究の学問的な成果は非常に少ないのだが、本論文は近世播磨の俳諧について、資料の博捜に基づいてその見取り図を描き、京都に近い地方俳壇のあり方の具体相を示した点で、大きな成果をあげている。

本論文は、播磨においては栗の本一門と風羅堂一門という二大勢力があったということを明らかにし、両俳壇がそれぞれ芭蕉顕彰運動を柱にすえて一門を形成・展開させたことを強調している。そこに本論文が単なる地方俳諧研究に終わらず、日本近世俳諧史研究の主流と連繋する可能性がある。また、人物本位で考察されるので、必然的に漢詩・和歌などの他ジャンルの研究分野とも関わりをもつことになり、奥行きと広がりが感じられる。

論理を緻密に展開するタイプの論文ではないが、新しい指摘・発見が至るところにあり、中央に比較的ちかい地方俳壇のありかたを、俳人個人に即して、非常に具体的に描いている点は評価できる。たとえば第Ⅰ部第二章で瓢水の事跡を追い「地方俳人が、雑俳から俳諧の道に入り、修行して俳諧師となり、雑俳の点をして生活する。この瓢水の生き方は、当時の俳諧師の一典型であった」（P62）というのは、具体的で説得力がある。また第Ⅱ部第二章の「一、惟然の来訪」では、惟然が姫路の俳壇を席巻するさまが、よく捉えられ、またなぜ姫路で受け入れられたかの分析も適切である。同章「二、丹頂堂寒瓜」については、その控えめな人柄と、俳壇経営力で門流を広げていく手腕が見事に描かれている。とくに寒瓜が芭蕉五十回忌として、風羅堂を建立するなどの追善事業が、諸国の蕉門俳人の五十回忌催行と連動しているという指摘は重要である。さらに前句付の奉納や芭蕉遺物の尊仰など、俳諧という文芸行為の文化的意味についても考察を及ぼすあたりは意欲的である。

その一方で、播磨俳壇についての総論的記述を欠いていること、それぞれの一門の俳風についての考察が物足りず、作品については印象批評的な感じが否めない部分もあること、4部構成とはいえ、Ⅰ加古川・Ⅱ姫路に対して、Ⅲ高砂・Ⅳ加西について言及するところが少なく、分析としてもやや物足りない印象を与えてしまうこと、市史の原稿を元にしているところが多く、論述に平板な部分が見受けられることなど、問題点がないわけではない。

とはいえ、播磨という一地方俳壇の様相を具体的に明らかにし、俳諧研究の新たな可能性を拓いた本論文の意義は高く評価できるものであり、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。